

さなぎ達通信

平成26年6月号

VOL.34



認定特定非営利活動法人 (NPO 法人) さなぎ達

〒231-0028 神奈川県横浜市中区新橋1-6-4 新橋ビル1階 (最寄駅 JR 関内駅)

TEL : 045-228-1055 E-mail: sanagitachi@nifty.com HP : <http://www.sanagitachi.com/>

「普通でなくたっていい」

理事長 山中 修



「誰もひとりぼっちにしない」は、今年のJRの電車内に吊されたNPO紹介用の「さなぎ達」のキャッチコピーであるが、実に一語で簡潔にできているといつも感心する。

これは、もと、コピーライターでもあった、作家・脚本家の山崎洋子（当NPO法人の理事につき敬称略）の作である。

その山崎洋子が桜井武麿にインタビューを行った。桜井武麿は「さなぎ達」の創始者で初代理事長。現在の肩書は事務局長だ。「さなぎの家」や夜回りみまもり活動、そしてSOS班として最前線で活動中である。1983年から現場で活動し続けているさなぎの象徴的理事桜井を、プロの山崎理事が取材して活字にしているのであるから、まさにさなぎの紹介としては、贅沢三昧。今更私が付け加えることや、蛇足的注釈を入れることもなからう。

シリーズもので企画しているらしいので、是非ご期待してお読みいただきたい。

その山崎洋子に理事就任を依頼して2年が経った。お願いした理由はいくつかあった。

紅一点であった理事が辞意を表明されていたこと、山崎洋子の知名度、表現力など、当然期待した。

が、就任前に本人から伺っていた山崎洋子としての人生の「起承転結」のご自身の落とし前の付け方に何らかの影響があるに違いない、と感じたのもその一つである。

長い間、「書きたいが書けない。少し書いては止まって、そして屑籠へ」と聞いていたが、2年前に、「必ずかけますよ！書けるようになりますよ」と、

「さなぎ達」理事への就任を依頼した記憶がある。先月の理事会が終わった後、「ようやく、自分のこと書きました」と告げられた。

タイトルは「誰にでも、言えなかったことがある」。自身の生まれ（起）や生い立ち（承）や生きるための変遷（転）が赤裸々に書かれ、そして帯の裏には彼女の「起承転結」の落とし前としての「結語」がこう紹介されている。みごとだと思う。

「孤独で愚痴っぽい老女のままでいこう。それなりに頑張ってきたことを認めてやろうじゃないか。」

この二年間、山崎洋子は当初は理事として、加えて今は「てふてふ」の参加者として週一回の就労作業にボランティア従事している。この、「てふてふ」参加活動がとうとう彼女に「書くことを可能にした」のだと思えてならない。この号に「てふてふ体験記」として掲載されているので、これも山崎理事の人生背景を汲みつつお読みいただきたい。

「普通」であることの暴力。

小さいころからみなさんも親からよく言われたでしょう。

「ちゃんとしなさい」「ふつうにしてなさい」。

還暦を迎える小生、22歳と21歳になる子供達にこれまでこのことばで指導したことはない。15年前から寿とかかわり始めたことが、大きく影響していそう。

「普通でなくたっていい。」

さなぎの仲間である人生の先輩、桜井や山崎理事から、はたまた寿の人たちからあらためて学んだことです。

僕が関わった「さなぎ達」櫻井武麿 VOL.1 (聞き手:山崎洋子)



この町とのかかわりですか？ 教会があるでしょ、寿に。そこへ礼拝に通ってました。ずっと前から、クリスチャンとしてね。

その頃はこの町も元気で、家族で簡宿に住んでた人もたくさんいましたね。だけど、両親とも働いてるでしょ。ほったらかしで御飯を食べさせてもらえない、いじめにあうから学校も行っていないという子供が何人もいたんです。教会はそういう子供達に朝御飯を提供してました。

だから、子供を通して親とも知り合うし、酔っぱらって教会に入ってきたりする路上生活のおじさん達とも顔見知りになるしでね。まだ会社勤めの身だったから、日曜日とか、会社が終わってからの時間帯でしたけど。

僕の転機になったのは1983年。少年達が路上生活者を襲って殺傷する、という事件が横浜で起きたでしょ。無防備で弱い人達が、ひどい仕打ちを受けた。ぼくにとっては身近な人達だったから、すごいショックでした。

その年から市民グループによるパトロールが始まりました。週に一度、区内周辺の路上生活者達を見て回って、温かいスープや衣類を配る。相手がいやがったら無理に声は掛けないけど、健康状態はどうか、相談にのれることがあるか、さりげなく尋ねる。これがいまに至るまで続いている木曜パトロールです。僕も翌年から参加するようになりました。

あの頃の横浜で忘れられないのは、傷痍軍人をよく見かけたこと。足や腕を戦争でなくした人が、白い着物を着て、アコーディオン弾いたりしながら物乞いをしてるという、あれです。いまの若い人は知らないだろうけど。

戦争のせいで障害者になって働けなくなったんだから、国からある程度の救済金は出たでしょう。だけど、失ったものは決して戻らない。戦争という理不尽に対する叫びが、その姿からほとぼしってるようで、見るたびに胸が詰まりました。

それと、当時の路上生活者には、日本語を喋れない在日の人が多くいました。戦時中、労働力として日本へ強制連行された人達だと思います。声をかけても「来るな！」という手振り、僕らは追い払われた。世の中はバブルで浮かれてたけど、日本はまだまだ戦後処理をしてない。そう思わずにはいられなかったですよ。

やがてバブルが弾けると、職を失った人達が路上に溢れました。その頃から、寿は高齢者や心身に障害を持つ人達の町に移行していったのです。だけど行政はずっと、生活保護の申請に来た人達しかカウントしていなかった。毎年、冬には2, 30人の路上凍死者が出てたし、アルコール中毒の禁断症状に苦しむ人達が大勢さまよってたんですよ、横浜の中心地で。

そうしたことから、路上生活の人達がいつでも来られる場所、お茶を飲んで、話もできる場所が欲しいということで、1999年に、「クレイジーサロン」という「さなぎの家」のもとになったものができたんです。NPO法人さなぎ達の誕生はその2年後ですね。

で、行政も徐々に現状と向き合うようになって、2004年から寿町なんでもSOS班事業というのが始まりました。行政と民間の協働事業です。「さなぎの家」もそれですね。あれから早くも10年.....その間、いろいろあったでしょうって？ そりゃ、ありましたよ。でも長くなるから、その話はまた今度にしましょうか。





てふてふの夢

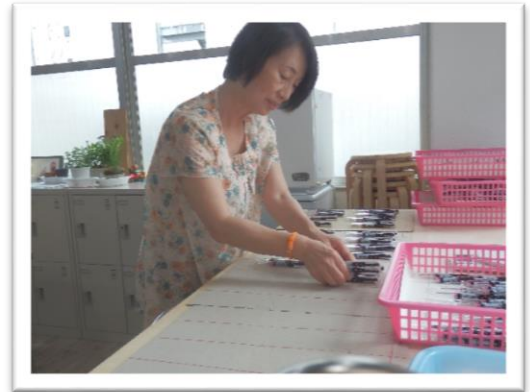
理事 山崎洋子

一週間に一日だけですが「てふてふ」に通っています。利用者さん達と一緒にボールペンを組み立てたり、寄付の衣類を仕分けしたり畳んだり……という作業をしているのですが、ここにいると、とても気持ちが落ち着きます。

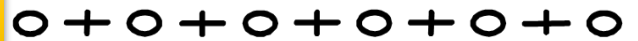
体力がなくても、覚えが悪くても、ここでは「できる振り」をしなくていいからです。「元気で有能な人」を演じなくてもいいからです。流行りの歌じゃないけど「ありの～ままで～♪」いられます。自分がいかに、世間の目を気にして生きてきたか、いまさらながら思い知りました。

普段は、仕事といえば、私の場合、独りの作業ですが、ここでは共同作業。私の失敗が皆の失敗になるかも、と思うと何をするにも真剣になります。その緊張感がまた、新鮮で心地よいのです。

一人一人の個性や事情を、ありのままに受け入れる。その上で、それぞれの能力や美点を、利用者さんとスタッフが一緒になって見つけ出す。「てふてふ」をそういう場所にすることが、「さなぎ達」の願いです。



* イベント開催報告 *



「これからのことぶき…支援者のこころの手あて/共に生きる自立を求めて」を開催しました

3月10日に、「依存・共依存」をテーマにイベントを開催いたしました。(NPO法人さなぎ達、ポーラのクリニック、横浜遊技場組合主催)

前半は、さなぎ達が関わっている利用者の状況、事例紹介を実施。後半は「これからのことぶき…支援者のこころの手あて/共に生きる自立を求めて」と題し、NPO法人ティーンズポスト (<http://www.teenspost.jp/home.html>) の代表理事・八巻香織さんをお招きし、依存症になる心の状態を分かりやすく解説していただきました。

当日は、寿地区に関わりのある福祉・医療関係者を中心に約50名が参加。

「心の健康」とは「恥ずかしさ、淋しさ、こわい、好き、不安 等」の感情をそのまま感じることであり、正直な気持ちを話すコミュニケーション、他人に出会うこと、学びやユーモアの大切さの話がされ、八巻さんのお話は、思わず「うん、うん」と共感してしまう、様々な人たちと関わりが私たちにとっても大変勉強になる機会となりました。



* さなぎの食堂便り *



高齢者の「食」と「職」

職員 岡野慶光

もともと、さなぎの食堂は2002年の秋に「パン券で3食温かい食事を」をテーマにスタートしたのがきっかけだ。ただ2005年頃に自立支援センターが出来たこともあり、2012年にはパン券の発行も終了となった。今は街の方が現金で食べにきてくれている。

また、食堂の発足当時はジョブトレーニングという名前で街のかたの雇用を生み出し、十数名のかたが一緒に働いていた。それも様々な理由でだんだん減っていき、今それに近いのは4~5名程である。年は私の倍位だが、ときに真面目に、ときに楽しく仕事をされている姿が私は正直嬉しい。相談にのってもらったり、アドバイスをいただいたりして有り難い存在の方ばかりだ。

自分が好きで選んだ仕事だが、忙殺されたり立ち止まることもままある。そんな時彼らの姿勢から学ぶことはなんと多いかと気づかされる。

さなぎの食堂のテーマに「食」と「職」というのがある。

「食」は、なるべく安くて美味しいものを街のかたに食べてもらうこと。

全体の約1割程だが、個人の方や支援団体・企業からも食材を提供していただき活用している。これらなくして運営するのもままならいというのが現状である。年々変化するお客さんのニーズにも対応してゆく必要がある。

「職」は、雇用をつくったり外部からでもボランティアの方や障がいのある方、学生など様々な方と共に働ける環境であることだ。今また新たにそういった枠組みを作ろうと模索している。

他に居場所のない人たちがそれぞれの意思でここにいる。そんな、さなぎの食堂です。

「さなぎの食堂」では、ボランティア募集を行っています。詳しくはさなぎ達ホームページをご覧ください

【送付・お持込み先】

住所：〒231-0026 横浜市中区寿町 2-7-7 神崎ビル1階 さなぎの食堂

時間帯：9時~18時まで受付

【問合せ先】

E-mail: sanagitachi@nifty.com / TEL:045-227-7663 (さなぎの家)

【注意事項】

H25年度産以降のお米の受付を行っています。

誠に申し訳ないのですが、着払いでの受取は行っておりません。

ご支援・ご協力宜しくお願い致します！！

* 緊急募集 *



お米のご寄付
よろしくお願い致します



データブック (平成26年1月~5月)

	1月	2月	3月	4月	5月
さなぎの家 利用者総数 (人)	2758	2166	2650	2751	2753
物品配布数	1621	1489	2047	2526	2113
木曜パトロール 野宿者平均数 (人)	112	107	107	101	129
さなぎの食堂 食数 (食)	8229	7933	8663	8438	7870